令和6年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【野田小学校】

① 今年度の課題と授業改善策

	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	【学習上の課題】 漢字や計算などの基礎基本の定着率の個人差が大きい。算数の「図形」領域の正答率が他の領域と比べて低い。 【指導上の課題】 学校全体で共通の取り組みをし、途中経過を把握・検証し、改善を図る必要がある。	⇒	学級の実態に合ったオリジナル漢字テストを作成し、再テストを実施する。【月に2度の実施】 算数の100問計算を毎時間実施する。計算内容は、単元に合ったものを作成する。【算数の授業にて毎時間実施】 図形の単元では、観察や構成、作図などの活動の充実を図る。【各図形領域単元】 学校課題研修と関連させ、結果の入力シートを作成し、取り組みを振り返る時間を設ける。【学期に2回】
思考・判断・表現	【学習上の課題】 国語の「話すこと」について課題がみられた。算数では、筋道を立てて自分の考えを説明することに課題がみられた。 【指導上の課題】 意図的に自分の考えを説明する場面が十分ではない。自ら学ぶことができる仕組みに課題が残る。	⇒	学年に応じた題材の設定をしたり、目的や意図に応じて話し方を工夫したりしてスピーチを各学年で行う。【月1回以上】 算数の時間に「式・図・言葉」などを用いて個人で考える時間を確保し、友達に説明する場を設ける。【各単元で2回以上】 PDCAシートを作成し、児童自身が取り組みを振り返る自己評価や他者評価し、次への学びにつなげる。【学期2回以上】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語の「言語の特徴や使い方に関する事項」に課題がみられた。話し言葉と書き言葉との違いや漢字を文章で正しく使うことに課題がみられた。その機会を増やすために、様々な場面において主語・述語の関係を意識して話したり書き表したりすることや文章のつながりを考えて漢字を使う場を設ける必要がある。算数の「図形」領域において、深い理解を伴う知識やその活用に課題がみられた。生活場面を想起し、活用できる知識・技能を習得させられるよう、問題文から関係性を把握し、立式したり、具体物を活用したりする活動を増やしたい。児童全員が、「国語も算数も授業の内容は分かっており、問題について諦めずに考える」と回答しているが、今回の調査では解答時間が十分でないと回答した児童が約30%近くいたことから、問題文から情報を整理し、既習事項を適切に活用して多面的に考える場面を増やしていきたい。
思考・判断・表現	国語の「読むこと」に関する内容や、記述での解答の正答率は高く、自分の考えを伝えるための表現の工夫や自分の思いを書き表す力が向上していると考えられる。さらに自分が伝えたいことを正確に表現するために、目的や意図に応じて、必要な材料を分類したり関係付けたりする活動を充実させる。算数では、立体と球の長さの関係や、問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことに課題が見られた。立体感覚を養うため、図形を構成する要素に着目しながら、立体図形を見取図や展開図で表したり、逆に、見取図や展開図から立体図形を構成したりする活動場面を設定する。また、関係性に着目できるようにするために、数量の変わり方を表や式を用いて考察し、式の意味を深めるとともに関数の考えを伸ばす活動を重視したい。全体的に無回答率は低く、解決方法を模索し、様々な視点から解答しようとする児童の意欲の高さがみられる。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	漢字の再テストを月に2度以上実施できている。学期を通して平均90点以上の児童には賞状を渡している。算数の100問計算は、単元に合った内容で作成し、毎時間実施できている。月末には、時間が縮まった児童と正答数が増えた児童に賞状を渡したり、成果を振り返る時間を設けたりしていることで、計算力の向上が図られている。 図形の単元では、観察や構成、作図などの活動につながる教材の工夫に課題がある。全学年で100問計算と漢字テストの結果の入力シートを作成し、その取り組みを振り返る時間を設け、児童の変容や方策の効果を話し合うことができた。	図形の単元では、観察や構成、作図などにおいて課題があるため、立体や図形の性質の理解を深めるために、具体物を作成する。【図形単元毎】
思考・判断・表現	B	各学年のスピーチの取り組みにおいて、実態に応じた題材の設定をしたり、目的や意図に応じて話し方を工夫したりして月1回以上、スピーチを行うことができた。 算数の時間では、自分の考えを友達に分かりやすく伝えるために、「式・図・言葉」などを用いて考える際の掲示物を作成できた。また学習の最後に学んだことを振り返り、書き表す時に活用できる「振り返り言葉集」を作成し、活用することができた。また、各単元で2回以上、個人で考える時間を確保し、友達に説明する場を設けることができた。 PDCAシートの効果的な活用について検討している。	児童の実態に応じたPDCAシートを作成する。【2学期中】

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（概ね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	社会・理科では正答率がR5年度調査より平均3pt上昇したが、国語・算数では平均2pt下降した。国語では、「書くこと」に関する正答率が高く、「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、正答率が上昇した。これは、漢字テストや再テストを実施したために、知識の定着が図られていると考えられる。算数では、「数と計算」に関する領域のうち、四則計算について全学年で課題が見られた。乗法九九は定着してきたが、四則を混合した式や計算に関して成り立つ性質の小数や分数への適用となると正答率が下がる傾向があった。また、かけ算や割り算の筆算についての理解に課題がみられた。算数の授業では、ほぼ毎時間100問計算を実施してきたが、問題を単元に合わせて改善していく必要がある。
思考・判断・表現	社会・理科では正答率がR5年度調査より平均2pt上昇したが、国語・算数では平均2pt下降した。国語では、「話すこと・書くこと」に課題がみられた。国語の授業では、個人で考える時間の確保や、思いを表現する活動を重ねてきたが、より多くの活動時間を確保する必要があると考えられる。算数では、既習を活用した応用問題に課題がみられる。問題の場面把握ができるよう、線分図や数直線、図などを活用し、「図・式・言葉」を用いて解決したり、具体物と関連付けて解決するなどの数学的活動を重視する必要がある。「話し合う活動では、内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていますか。」の回答では、94%の児童が肯定的な回答していることから、話の中心を捉えて聞いたり、目的や意図に応じて話したりするための活動を継続する必要がある。

⑤ 授業改善策の達成状況

	評価（※）	
知識・技能	B	漢字テスト・再テストの継続実施とともに結果を評価したことで、児童の意欲が高まり、学級の平均点が上昇し、習熟を図ることができた。算数の100問計算では、学年に応じて単元に合わせた問題を作成することができた。点数を毎回記録することで、児童が目標をもつことができたり、自身の変容や効果的な学習方法に気付くことができたりした。また、計算技能の向上がみられた児童に賞状を出したことで、年間を通して意欲的に取り組むことができた。図形の単元では、具体物を作成したことで、立体の捉え方を意識できるようになった。作図においては、個人で具体物を作成したり活用したりしたが、活動から得た知識を活用することに課題があった。授業時間だけではなく、家庭学習の時間も確保し、十分に習熟できるための時間が必要である。
思考・判断・表現	B	国語では、月1回以上、スピーチの取り組みを行うことができた。自分の考えを伝える時や気持ちを表現する時に使える語彙シートを作成して、目的に合わせて活用することができた。算数では、「図・式・言葉」のつながりを意識して課題に対する考えを書く時間を確保したことで、考えを書き表すことができる児童が増えた一方で、適切な言葉を使って、順序よく説明する力に課題がみられた。高学年では、PDCAサイクルシートを作成し、計画的に学習を進め、結果を振り返る機会を設けたことで、学習方法の改善につなげることができた。一方で、児童が課題に対して目標をもつことやねらいを明確にできないこともあった。自己評価は実施できたが、他者評価は実施できなかった。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（概ね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と授業改善策

知識・技能	国語では、「読む・聞く・書く」の学力全体を底上げするため、暗唱チャレンジの継続や、読書活動の充実を図る。漢字を正しく使えるよう、オリジナル漢字テストの内容を見直したり、既習の漢字を他教科でも活用したりしていく。算数では、四則計算の技能を高めるため、「2分間チャレンジ」に取り組む時間を毎時間確保する。また、問題の内容を単元のねらいに沿った内容に精査してオリジナル問題を作成し、繰り返し行うことで技能の定着を図っていく。家庭学習の取り組み方を工夫・改善し、家庭と連携を図る。基礎基本の定着に関しては個人差が大きいため、個別に支援を講じる必要がある。
思考・判断・表現	国語の学習では、教師が児童に身につけたい力を精選し、児童に目的意識や相手意識を明確にした言語活動を充実する。また、児童が目的や意図に応じて必要な情報を取捨選択し、要旨をとらえ、表現する場を設ける。伝える力を高めるため、スピーチは継続して取り組んでいく。算数では、算数の用語の定着を図るために、前時の授業内容を確認し、既習が活用する場を設ける。学習場面から見いだした問題を解決する際、「式・図・言葉」を用いて数学的に表現し伝え合う活動を重視する。また、生活とのつながりを実感できる問題を作成したり、授業で学んだことを生かして新しい課題に取り組む機会を設けたりする。